

# 「岩手県における漁村対策に関する調査研究」 報告会

東日本大震災により被災した岩手県の三陸沿岸の市町村では、復旧・復興の努力が続けられていますが、生業を支えていた漁船、漁具等を一切津波に流された傷跡は大きく、被災漁業地域の復興にとって、地域の漁業・水産業の再生が待たれます。また三陸沿岸北部には希少な観光資源がありましたが、津波の被害もあり、観光客の落ち込みによる地域経済の衰退も続いています。

こうした状況に対し、当センターでは被災した岩手県の漁村復興に関する調査研究をテーマとして取上げました。本報告会では、岩手県三陸沿岸地区に焦点を絞り、小規模な漁村ながら豊かな三陸の海の幸を活かす取組みや、震災の被害を乗り越えて、内陸部との交流を深める観光モデルの提案を取り上げます。

また本報告会の冒頭、外部有識者の一員として検討に加わって頂いた、結城登美雄氏に講演頂きました。

結城氏が東北の中山間地域・600集落を訪ね歩き、東北地域の人、生業、暮らしに寄り添ってきた経験の中から、東日本大震災後の岩手県沿岸部漁村の復興に向けてのご講演です。

## 1. 開催日時

平成24年3月22日(木) 14:00～16:30

## 2. 場所

ホテルルイズ 「万葉の間」(岩手県盛岡市)

## 3. フォーラムの概要

### 【プログラム】

○講演 ―岩手県沿岸部漁村の復興に向けて―

【講師】 民俗研究家 結城 登美雄氏



【講演・結城登美雄氏】

今日はこの「岩手県沿岸部漁村の復興に向けて」という頂いたテーマに則しましてお話申上げたいと思います。政府の復興会議等に見られるように、大きな流れは出てきましたが、具体的にはこれから長い年月をかけて復興への道をたどると思います。あまり被災地の片付けが進んでいない印象しか持っていないで、今日これから話すことが役立つのかなと心許なく思いながら話すところです。ご紹介頂きましたように、95年頃から三陸沿岸の沢山の集落に怪しまれながらも入りこんで、お話を聞かせて頂きました。その時撮った写真も沢山の集落があるのでご覧頂きたいと思います。 (―中略―)

NHKで取上げられたこともあり、吉里吉里(岩手県上閉伊郡大槌町)の浜の取組みを手伝ってくれということで、行きました。30人くらいの漁師さんの内8人が話し合っ、漁の再開に取組みました。先ず50キロの土俵を洗めて、<sup>いかだ</sup>筏を動かさないようにするため、その土俵づくりから始めました。あと魚を捌くときの矢場、(作業)台です。若い人を中心に上手くいっています。船が5艘しかないので、皆がやりたいと言

わずに、先ず若い人にやってもらって、老人は後方支援に廻り、やがて必要が出てきて、状況が良くなったら年寄りも漁場に出るという浜ならではの役割分担にしました。普通「きそん」と言いますが、長い間の付き合いで気心が知れますから出来たんだと思います。

女の人達は去年の8月にオープンした仮小屋の食堂に居ます。仮設住宅に入って1人・2人暮らして誰とも話さなくなっていて、何かしなきゃと思っても何もできない。テレビを見てると、あの日の津波の映像が流れると体が強張ってしまう。何か仕事はないかな、何でもやるよ。ラーメン、食堂はどうか。美味くはないけど皆が顔を合わせて食べる場所も必要なのではないかな。何か新しいもの、サケとイクラを使って親子の焼きそばはどうかと、みんなで色々話し合いました。新聞にも載りました。「海の家」風仮設店舗で3時間ほどの営業時間ですが、皆がやって来る。仮設住宅に1人でいると、暗くなってしまう。飯ぐらい人の居る所で食うと気が紛れて、美味しく感じる。

大根を播く人、葉っぱを植える人、あちこちでこういう営みが生まれています。自然を相手に生きる人、海辺を生きる人、大地の上に生きる人の逞しさ、強さみたいなものを教えて頂いた次第です。船が無い、漁具が無い、市場が無い、何もできないではないのです。裏山の杉は爺さんが植えたものだけど、海ばかりやって自分は何も手入れしなかった。つなぎの仕事だけど、海も大事だけど、やっぱり山も大事だと。放置したため下草が生えて山菜が出てきて、手をかけないとダメだなと、この年になってわかるよと言う人がいました。

そして次のステップに向けて頑張る漁師達もいます。現場の匂いを嗅いだくらいでわかった気になって、かくあるべしというプランを日本の叡智が集めて、そのプランを現地に押しこんで行くのではなくて、立ち上がろうとする現地

の人達の立上がる方向を支援する、復興プランというよりも復興支援プランという方が大事だと思います。今日の2つの調査報告については、その流れにあるものと想像しています。

これは崎浜です。片付けが進み、碑が立っています。日本でとあえて断言して良いと思いますが、津波の供養碑、記念碑が日本で一番多いところだと思います。それだけ過酷な経験をした場所だと思います。地元の人がそれに手を加え、費用を出しながら建てた碑には「長く大きく揺れる地震は、津波の警報と心得よ。直ちに近くの高台に登り、1時間程はその場を離れぬよう」と親が子に言うように、具体的に高台に行って1時間は動くな、2波、3波がやってくると伝えています。そういう碑が随所に見られます。また、亡くされた悲しみの祈りの碑が沢山あります。

漁師さん達が次に向かって準備をされてる姿も見受けられるようになりました、11月位です。「一歩ずつ前へ、崎浜」そして「今を乗り越え、みんなで喜びを分かち合い幸せな未来を創造する崎浜・起喜来」とあります。この立ち上がろうとする気持ちと、それを後押ししたいもののだと思ったりします。誰かが引っ張り上げるのではなく、立ち上がる人を後ろからそっと押してやる。そのためには先ず現地に行き、現地の人々がどのようにしようとしているのかを知る。三陸の海辺の人は決して弱者ではありません。大きな自然に向かい合って来た逞しい、強い、そして優しい人達です。その人達の復興プランが大事だと思います。

崎浜を離れて、合足あつたりに行くと2つの石碑が一緒に並んであります。ここまで津波が来たということで、こっちの道路を上げれという意味です。1つは明治29年の明治三陸大津波の時です。4人しか生きられなかったそうです。その後昭和8年の津波がありました。しかし、今回の東日本大震災でもうダメかと思ったら、イカを捕っていました。もうイカを干しておりました。つまり海に住む人は、これだけの厳しさに打ち

ひしがれながら少しずつ立ち上がり、もう一度海に立向かう人達が確実にいる、そんな姿を見てきた1人です。

この2つの石碑、明治29年の碑と昭和の碑の間が空いてるので勝手な想像をしてみました。もしここに3.11の碑を建てるとしたらどんな時間が流れたのかという意識で色々考え、ある人物に出会いました。宮澤賢治です。宮澤賢治は明治の津波・明治29年に生まれました。そして昭和の津波・昭和8年に37歳の生涯を閉じました。9月に亡くなりましたが、その年の3月に、詩人の大木実にお見舞いを受けたので、その返信として出した葉書が2年前に発見されました。葉書裏面には「この度はわざわざお見舞いをありがとうございます。被害は津波によるもの最多く海岸は実に悲惨です。私共の方野原は何ごともありません。何かにみんなで折角春を待ってある次第です。まづは取急ぎお礼乍ら」とあります。それから半年後、賢治はこの世を去ります。

その賢治が岩手でイーハトーブ、その他の作品を書いたり残していますが、そのモチーフを十分捉えることができませんでした。そこで宮澤賢治の勉強をしたら、賢治の37才の生涯、その殆ど7割位は、凶作、冷害、大飢饉、地震といった自然災害によって岩手の人達が翻弄された時代を生きたのです。遠くから見たときに、呑気に童話、メルヘンだとかロマンチズムだとか言われますが、賢治が見ていた風景は過酷な岩手の現実であり、何故この自然に生きなければならないのかと愚痴を言いたくなる、打ちひしがれながら、それでも立ち上がっていく岩手の人々の姿であったと思います。それでもやって来る自然災害、賢治はそれを越えようではないかと、呼びかけて、イーハトーブ幻想に繋って行ったと思われれます。

今度の3.11の現実を、もしツーリズムという言葉で言うならば、賢治ならばどのように考えたでしょうか。賢治は、津波だけではなくて、

この岩手の地に生きる人々のことをどう受け止めたでしょうか、そんな目で捉えたいと思うわけです。僕は今宮澤賢治を読み直しています。そこには沢山の発見、見えなかった一人の詩人の姿があります。そして我々がこの岩手の地をどのようにしていこうとしているのか、そんなことを賢治を通じて問われているような気がします。〈—中略—〉

サラリーマンと同じような見方で現場を見た場合、間違ってしまうまいだろうかとは心配です。海面養殖の漁師1人が雇用の場を生み出しているという視点からもう少し丁寧に現場を見直して頂けないか。そして年間四季を通じて流し網ではこんなものをこの時期に採り、刺し網、一本釣り、延縄、海藻、養殖とこういうカレンダーを丁寧に受け止め、そしてその中で活用されていない魚種・海藻はどんな物があるか、多くの人に喜ばれるのはどんなものがあるのか捉え直して頂きたいと思います。〈—中略—〉

三陸の食文化には食材があります、そして調理・料理する力を借り、それを食べられる場所、できれば三陸にそういう出会いの場を幾つも幾つも持てるようにならないでしょうか。私の予測では300～500位の食材が三陸の小さな浜にあるはずで、それらをちゃんと受け止めて、もう一度活かし全国に発信していく、そんな道筋ができたらいいなと思っています。

### 報告① 「漁村・漁業を支えるネットワーク形成に関する調査研究」

- 若菜千穂氏(NPO 法人いわて地域づくり支援センター常務理事)
- コメンテーター 小山厚子氏(小山編集室主宰、フリーライター)

岩手県の沿岸漁業と集落の復興のためには、集落内の加工度(付加価値)を高め、新たに船を購入しないという選択をした人も集落内に留まって生産活動に携われる機会をより多くし、集落内に少しでも利益が循環するような仕組み

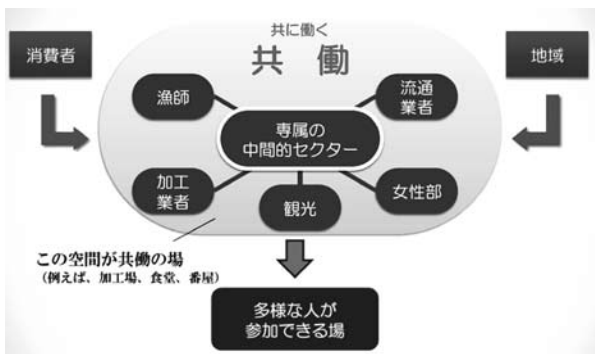
を新たに構築する必要がある。本調査・研究においては、被災集落の漁業の被災や復旧状況の把握および、新しい漁業生産構造の構築に向け、課題を整理した。漁業と漁村の復興を“暮らし”という視点から捉えなおし、“共働”をキーワードに復興の道筋を明らかにした。

### [報告概要]

- ①岩手県の漁業、水産業の特性
- ②被災と復旧状況
- ③現地調査(田野畑村島越, 大船渡市起喜来)
- ④復興に向けた“共働”の提案

**復興に向けた“共働”の提案**

- ・ 調査結果からの結論
  - 以前の生業をとりもどすには、なお時間がかかる。
  - また、漁師をやめても、働いていける仕組みが必要である。(それまでの間、もしくはその後も暮らしにくくするために)
  - 様々な世代が参加できる仕事が必要となる
- “共働”によって実現
  - 「地域づくり」も視野に入れつつ、「観光」や「食」によって「消費者」と直接つながる仕組みを実現する。
- ・ 提案
  - “共働”を実現するには、共働の場所(機会)と専属の中間的セクターが必要
  - ・ 共働の場所(機会)の例...共同加工場、体験プログラムを行う番屋、食堂など
  - ・ 中間的セクターの確保策...予約購入、オーナー制度、応援ファンドなどにより、中間的セクターの活動費を確保することが有効である。



### 報告② 「北部地域の新たな観光モデルの創造に関する調査

- 寺井良夫氏(株)邑計画事務所 代表取締役)
- コメンテーター 小椋唯一氏(東北観光推進機構・教育旅行アドバイザー)

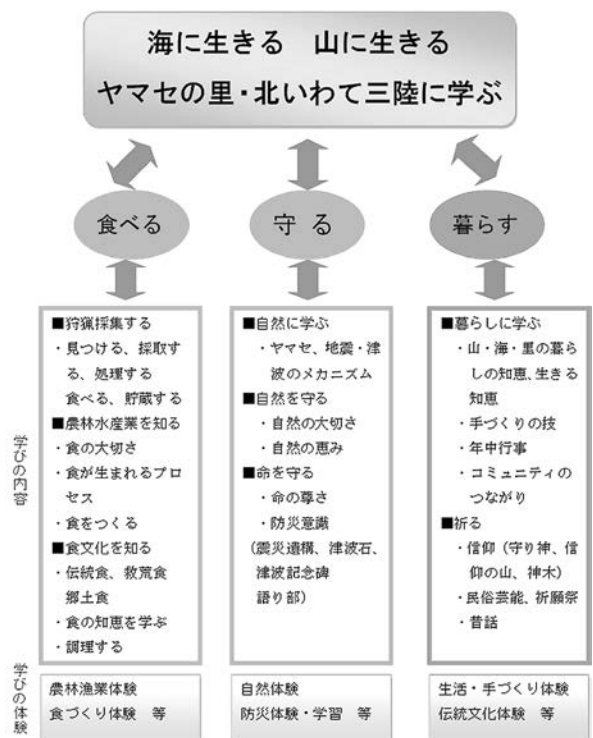
東日本大震災以前から県北・陸中海岸北部地域の入込観光客数は低迷傾向にあり、魅力ある観光モデルを創造、提案し、県内外対象に向け

て効果的に訴求していくことが重要な課題となっていた。震災を契機に、従来の物見遊山型観光から、学び考えるための目的型観光への転換を図っていくことも必要となる。本調査では、岩手県北部の三陸沿岸にかけての地域を調査対象モデル地域として、観光交流の拡大を目的に、震災や地域の暮らしを通じて学ぶ観光のあり方と観光コンセプトの提案、具体的展開方向についての検討を行った。

### [報告概要]

- ①北いわて三陸地域の課題と可能性
- ②観光交流コンセプトとターゲット
- ③観光交流の展開方向
- ④地域の特徴ある体験学習プログラム
- ⑤新たな観光モデルの実現に向けた方策

### 【観光交流コンセプト】



(本稿は平成24年3月22日調査研究報告会要旨 肩書は何れも開催当時 文責・東北活性研)